桜並木の夜

霧柚 祐兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
桜並木の夜

【Ｎコード】
Ｎ３１５８Ｊ

【作者名】
霧柚　祐兎

【あらすじ】
地球は汚れていて、綺麗に感じる事なんて無い。
でも、僕が暮らしている場所はとても綺麗だった。あの桜の木は文句無しの美しさだった。彼女と出会うまでは……。
彼女の綺麗な瞳を見て、彼女の綺麗な声を聞いて、彼女の綺麗な髪に触って、彼女の綺麗な笑顔に出会って、僕は世界で一番美しいものを見た気がした。それは、確信に近かった。
僕は彼女の夢を叶える事が出来るだろうか……。そもそも彼女の夢は何だったのだろうか。

桜の花びらに包まれた二人の少年少女の夢物語。

opening　チェリーブロッサム商店街

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

「ねぇ、綺麗だよね？　可愛い桃色で……。ピンクかなぁ？　桜色ってあるのかなぁ？　とにかく綺麗なの！　雪みたいにヒラヒラ落ちて来てさ。私ね、本当にこの場所が大好きなんだよ」
「僕も好きだよ。えっと……」
「それでね、この商店街はね、銀河鉄道みたいなの！」
「銀河鉄道？」
「そう！　銀河鉄道。琴之（ことゆき）は一緒にいってくれる？」
「一緒に？　ぅん……。美夢（みゆ）と一緒なら僕はどこでも行くよ！」
「私には夢があるの。この綺麗な桜の花びらみたいにね綺麗な夢があるの」
「そうなの？　どんな夢なの？」
「それはね……。まだ教えない」
「いじわる。教えてよ！」
「だーめ！　でもね……いつか琴之には絶対に教えてあげるから」
　彼女はそう言って笑っていた。地球は狂って汚いものにしか見えなかった。でも僕が暮らす世界はとても良い場所で、とても綺麗な場所だった。けど、彼女が言う一つ一つの言葉は、世界を見る彼女の瞳は、風に吹かれて揺れる彼女の髪は、彼女の可愛い笑顔は何よりも確かに美しくて、僕にはこの世界で一番綺麗に見えた。
　そう、美しかった。大好きな世界の桜の木よりも、彼女は美しかった。

Ｏｐｅｎｉｎｇ　チェリーブロッサム商店街

「進路希望ですか？　何も決まっていませんよ」
進路希望調査。その紙を机の上に広げて、僕は担任教師と二者面談を行っている最中だ。あれこれ、始めてからもう二十分は経過している。未だに僕の意見は変わらず、「決まっていませんって」と何度も何度も言い放っている。いい加減、言うのも飽きてきているのだけど……。
クラスメイトのほとんどは進学する学校の偏差値を目指して勉学に励んでいる。まだ中学二年の冬だっていうのに。一年後の予定を立てるほど僕は先を見据えてはいない。未来という言葉がくだらないとか、将来に希望を持たないとか、そんな理由で予定を立てないんじゃなくて、ただ怖かったのかもしれない。過去から離れていく事が。思い出を増やしていく事が。
「すみません。まだ一年あるんで、もう少し考えさせてください」
そう言って二者面談を終わらせようと思ったけど、その後も担任教師はしつこく質問責めしてきた。もう、早く帰りたいんだけどな……。

なんとか二者面談という拷問の空間から逃げ出して、週に五回は必ず歩いている学校から自宅への帰り道を歩いている。自宅は学校から徒歩で十分くらいの近場にある。特に目立ったデパートもないから面白味のない道なのだけど、僕にとっては大切な道だ。
小さな公園があって、キャベツ畑があって、ボロボロの電話ボックスがあって、そこには時代の流れとか世界の危険性を感じさせないような温かさのある道だ。
そして、その道を進んでいくと僕が生まれ育った場所がある。『チェリーブロッサム商店街』というちょっと洒落た名前の商店街が

僕の生まれ育った場所だ。僕の夢も信頼も景色も物語もこのチェリーブロッサム商店街にあって、この場所が僕の世界だった。

もともとは『桜並木通り』というちょっとした商店街だったらしいのだが、今は九十歳近い駄菓子屋のお婆ちゃんが昔、商店街の人達を振奮い立たせて、皆で力を合わせて活気に満ちた場所になったという。（その裏ではお婆ちゃんの暴力沙汰があったとか……）そして、名前が地味だ、とか言い始めたお婆ちゃんが『チェリーブロッサム商店街』と名付けたらしい。ただ英語にしただけなんだけど、商店街の人達はお婆ちゃんには反論出来なかったらしく決定したという事を肉屋さんの中村のオジサンに聞いた事がある。お婆ちゃんも若い頃はいろいろあったんだな……と、ちょっとお婆ちゃんを見るのが怖くなった時期も無かったわけではない。

昔にそんな壮大な商店街変貌計画があったのだが、商店街自体は五十メートルくらいの短いものだ。それでも愛情が詰まっている事は見に染みるほど感じている。

そのチェリーブロッサム商店街の二十五メートル地点くらいにある本屋さんが僕の家だ。今は親父と二人で暮らしている。僕のお母さんは、まだ僕が小さい頃に死んでしまったらしいのだが、詳しくは知らない。きっと親父なりの僕に対する優しさなのだろう。知らないのなら知らないままの方が辛い思いをしなくて済む、と。

この商店街には子供は僕しかいない。老人ばっかりだし、五十歳より若い人はほとんどいない。だから、そんな人達のお子さん達はこの商店街を出て行き、きっと今頃は都会で仕事をしていることだろう。親父は駄菓子屋のお婆ちゃんと昔から知り合いらしく、お母さんを亡くして落ち込んでいる時、お婆ちゃんに商店街に誘われたらしい。僕を除けば商店街で最年少だ。アラフォーってやつなんだけどね。この商店街はそんな愉快な場所だ。そして、この商店街の名前の由来でもある商店街の真ん中に、ウチの本屋の目に立っている桜の木は文句なしの美しさだ。今は冬だから葉っぱもないのだけど……。春になると本当に綺麗に咲き誇る。商店街の自慢の桜だ。

桜の木は一本しかないのに、何で昔は『桜並木通り』だったのだろう。不思議だ。

僕の世界は今日も元気に生きていて、八百屋と魚屋のちょっとした喧嘩があったり、駄菓子屋のお婆ちゃんの九十歳近くとは思えない罵声が聞こえたり、本屋から店を開けているのに聞こえてくる親父の鼾(いびき)があったり、この世界は今日も順調に進んでいる。そして、また春になれば綺麗な桜が見れるのだろう。商店街の自慢である桜が見れるのだろう。

あの時のような綺麗な桜が見れるのだろう。

第一章　訪れた偶然の春

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

あの春の日の朝、皆で飼っていた学校のアイドルの子犬が死んでいた。無惨にも腹の辺りにカッターナイフが刺さっていた。皆は朝から号泣していて、予定されていた全校集会では一分間の黙祷が捧げられた。皆は泣いてばかりで先生達の話なんて聞こえてなんかいなくて、その日に転校してきた女の子の紹介も聞き流す程度に終わった。

でも、僕は泣いてはいなかった。子犬と遊んだ事があるし、本当に可愛いと思っていた。なのに僕は泣いてはいなかったんだ。

その日、たまたま僕は早く登校していて、血を流して倒れている子犬を見かけていた。ただ見つめ続けていると血だらけの子犬がだんだん可愛く見えてきました。そんな感情が僕は怖くて、教室に逃げ出した。あの感情は何だったのだろう。そんな事をずっと考えていたから、泣く事もなくて、周りの皆から少し変な目で見られ始めました。

転校してきた女の子は僕のクラスに来ました。けど自己紹介をしてもクラスの皆はそれどころではなくて、ただ泣いていました。でも、泣いていなかった僕だけは女の子の自己紹介をしっかりと聞いていて、まるで二人きりで話をしているかのようでした。

それから、僕はイジメられるようになりました。「子犬を殺したのはあいつだ」と言われ始め、クラスにも学校にも居場所が無くなりつつなっていました。もう駄目だ、僕はもう駄目なんだ、と思い

ました。でも、そんなイジメを気にせず、転校してきた女の子は僕に話し掛けてくれました。「貴方の趣味は？」とか「貴方は本を読む？」とか、そんな事を僕に訪ねてきました。僕は本当に本当に嬉しくて、泣きそうになりました。僕は女の子が特別に見えるようになって、嫌になった学校にも足を運ぶ価値が出来て、嫌な半面、楽しみも出来ました。

休み時間には女の子と図書室に行く事が習慣になりました。女の子はいろいろな事を知っていて、いろいろな本を読んでいました。「昔の本はちょっと読みにくいけど、物語が本当に良いものばかりなんだよ」と僕に何度も教えてくれます。

結果、女の子も一緒にイジメられるようになっていきました。でも僕と女の子はそんな事があっても二人で一緒にいました。僕はこれからもずっと二人で生きていけると正確な根拠も無しに、でも切実に思っていました。女の子も同じ事を思ってくれていればいいな、と思いながら。

そんな気持ちを言葉で表すなら、どんな言葉なのだろう。

その時の僕には、まだわかりませんでした。

第一章　訪れた偶然の春

昔の夢を見た。今日はなんか微妙な目覚めだなって思いながらパンを食べて牛乳を飲み、家を出た。親父は学生の僕よりも長い時間寝ていて、仕事ってこんなに楽なものなのだろうか、と全世界の会社員を敵に回すような事を思わせるほどの大きな鼾を鳴らしていた。開店の時間は適当だし閉店の時間も適当。ちゃんと仕事しろよ。寝てばっかで腹でてきてんだろ。

今日も学校は平凡に始まって、平凡に終わっていくのだろう。楽しみが一つもない。まぁ、面倒な事に巻き込まれているわけでもな

いから、気楽に時が過ぎるのを待っていればいいのだけどね。
　そういえば、進学について考えないといけないんだよね。僕が通っている『伊勢御中学校』はなかなか頭の良い学校だ。小学生から中学生になるのなんてちょっと大人になるくらいだよって感じで何も考えずになるようなものだけど、僕はこの頭の良い中学に受験し合格して入学した。普通にしていれば小学校の近くの中学校に入学出来たのだけど、僕はこの道を選んだのだ。まぁ、こっちの中学の方が家から近いしね。小学校までは徒歩で三十分以上もかかっていた。はっきりいって、もう懲り懲りだった。
　そんな独り言のような事を考えながら歩いていたら、もう学校に到着だ。今日はちょっと早く来ちゃったかな……。暇だから校庭を少し歩いてから教室に行こう。朝の運動にね。人はまだ疎らで騒ぐ声も聞こえてこない。
「あぁ、寒い……」
　今更だけど冬の寒さに限界を感じたので玄関を目指す。その時、玄関の辺りに少ないけど人が群がっているのに気付いた。なんだ？
　なんかあったのか？
「うわ……」
「かわいそう……。誰がこんな事したの……」
「早く先生に伝えてこいよ」
　そんな声が聞こえてくる。いろいろな事に興味がない僕でも、さすがに気になったので人の群れの中を覗いてみる。その光景を見た瞬間、僕は懐かしい感覚を思い出した後すぐ吐きそうになった。その光景を見てはいけない。体が脳が目が僕に知らせるけど、僕はその光景を見たまま固まった。
　うさぎが死んでいる。腹にカッターナイフを刺され、血を流している。
　机の上で寝たふりをしていなければ動揺して強張っている僕の顔を誰かに見られてしまう。そしたらまた……。また……。

チャイムが鳴って朝のホームルームの時間を知らせる。担任の教師が時間より少し遅れて教室に来た。今までクラスにはいなかった女の子を連れて。
「噂で知っている奴もいるかもしれないが、今日から学校に転校してきた女の子だ。自己紹介を頼むよ」担任教師が誇らしげに言う。
「はいっ。今日からこの学校に通う事になりました。名前は一桃瀬美夢≪ももせみゆ≫といいます。皆さん、よろしくお願いします。」
その声の発信源の女の子はクラスに向かって言っていたが、目は僕を見ていた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

「貴方はいつも一人でいるの？　友達はいないの？」
「……」
「じゃあ、私が友達になる。どうせ私も一人だもん」
「だって君は転校してきたばっかだからだろ……」
「君じゃない」
「えっ？」
「ちゃんと名前で呼んで」
「えーと……。美夢」
「うんっ！　琴之くん。今日から私たちは友達だね」
暗闇の中に光が射した。そんな気がしたんだ。僕は暗い洞窟の中で彷徨っていて、助けを知らせる相手もいない。でも、その場所に光が射した。そんな気がしたんだ。
その時、僕は希望って言葉を信じてみようと思った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3158j/

桜並木の夜

2010年12月25日21時08分発行